

歩行者も運転者も見えていますか？ 見られていますか？



冬になり、日が暮れる時間が早まっています。暗くなると、交通事故の危険性が高まります。どのような点に注意すれば交通事故を防げるか確認してみましょう。

運転者は 見つける工夫を

前照灯は、ハイビームが原則です。これは、ハイビームが走行用前照灯と呼ばれ、ロービームがすれ違い用前照灯と呼ばれていることから分かります。ロービームは40メートル先まで照らすことができますが、ハイビームはその2.5倍、100メートル先まで照らすことができます。また、ロービームは対向車にまぶしくないように進行方向右側の照らす範囲が制限されているため、右側にいる歩行者の姿は発見しづらくなります。

8月26日に市内上池守で発生した死亡事故は、ハイビームの使用で防げた可能性がありました。前走車や対向車がいる時以外は、ハイビームを活用し、早い段階で前方の歩行者などを「見つける」ようにしましょう。

一方で、自動車のライトは、歩行者などに自分の存在を知らせる上でも必要です。「まだ見えるから」と思わずに午後4時にはライトを点灯し、歩行者などに「見られる」工夫も併せて行いましょう。

運転者からの見え方を写真で比較

暗い服装



明るい服装



反射材非着用



反射材着用



ロービーム



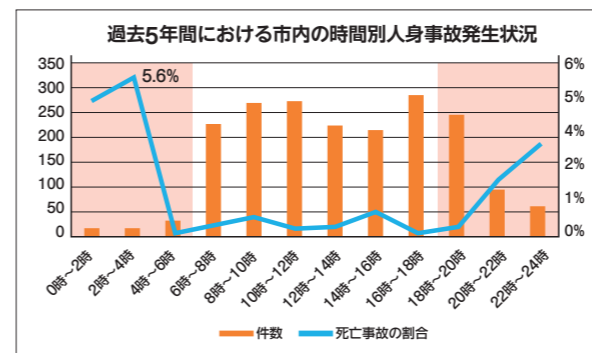
ハイビーム



交通事故発生状況

今年10月末日時点で、県内の交通事故の死者数は前年と比べ47人減少し、全国的にも大きく減少しています。

しかし、市内では3件の交通事故が発生し、4人の尊い命が失われています。これは、前年に比べ、3人増加となり、県内で最も多い数字です。いずれの事故も、夕方から夜間にかけて発生しています。過去5年間を見て夕方からの交通事故が多く、さらに夜間は死亡事故の発生割合が高くなります。

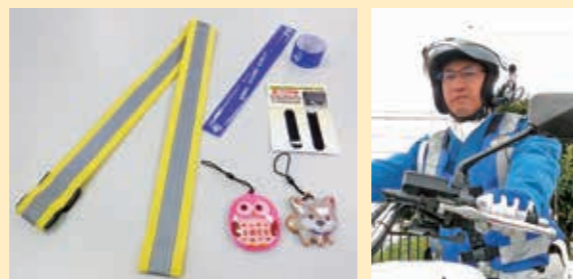


歩行者は「視認性」を高める工夫を

暮れ時、歩行者からは自動車が見えていても、自動車からは歩行者が見えていないことがあります。冷え込む季節となり、コートなどを着る機会が増えますが、それらは黒や紺色、茶色などの暗い色のものも多く、運転者からの視認性は悪くなります。明るい色の服装をしていれば、暗い色の服装よりも視認性はよくなります。しかし、日が落ち暗くなると、明るい時間帯よりも視認性は悪くなります。そこで、反射材を着用し、運転者からの視認性をよくしましょう。

反射材を着用すると、運転者らの発見距離が2倍以上長くなります。そして、反射材は胴体よりも、手首や足首など動く場所に着用すると効果が高くなります。これは、人の視線が、点滅するものや動くものに向きやすくなっているためです。また、反射材を着用していない人は、着用している人に比べて、2.5倍事故に遭いやすいという研究結果もあります。

インタビュー



反射材



行田警察署交通課 石川 樹 巡査部長

埼玉県警察では、昨年からの「きらめき3H運動」を推進しています。しかし、市内をパトロールしていても、反射材を着用している方はまだ少ないというのが実感です。ライトは足元から照らされることが多いため、足首やかかとに反射材を着用するとより効果的です。市民の皆さんも、「きらめき3H運動」を実践していただき、交通事故の防止にご協力をお願いします。

きらめき3H運動

早めのライト点灯

反射材の着用

歩行者保護

埼玉県警察ではきらめき3H運動の他、交通事故防止のための動画を作成し公開しています。

埼玉県警察公式チャンネル (YouTube)



意外に見えづらくなる見られる工夫

交通事故は、自宅から500メートル以内で多く発生する傾向にあります。自宅近くで慣れているからと、歩行者も運転者も気が緩みがちになってしまいます。「見られる工夫」を実践し、交通事故ゼロを目指しましょう。

▼問い合わせ 防災安全課交通担当 (内線2884)